

## タチウオとぐち類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 時村, 宗春 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008586">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008586</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



うぶすな

## — タチウオとぐち類 —

東シナ海漁業資源部長 時村 宗春

今回は「うぶすな（産土）」としての東シナ海の魅力のうち、底魚（そこうお：主に海底近くに生息し、底曳網等で漁獲される魚）の豊かさの例を紹介します。まず、量の豊かさの話です。東シナ海を代表する底魚はタチウオとぐち類です（写真1、2）。タチウオは、2005年に日本全体で1万6千トン漁獲されています。主に釣り等で漁獲される銀色の比較的高級な魚というイメージがあります。ところが東シナ海では底曳網漁業等で大量に（FAOの統計では2005年に中国が128万トン、韓国6万トン）漁獲される魚です。中国の魚類学者李春生先生によれば、中国人にとっては、高級魚どころか「いわし」のような存在だそうです。「ぐち類」はニベ科魚類の総称です。発達したうきぶくろ（浮力を調整する器官）を持ち、これを用いて音を出すため、日本語で「ぐち」、英語でドラムフィッシュ（太鼓魚）とかクローカー（蛙のようにガーガー鳴く）と呼ばれます。2005年に日本全体で3千トンしか漁獲されていませんが、東シナ海では、中国が76万トン、韓国が3万4千トンも漁獲しています（写真3）。このように、我が国沿岸とは桁違いの漁獲量があるのは、東シナ海では、底魚の生息に適した浅

海域が、我が国沿岸では考えられないほど広大であるためだと考えられています。次に、種類の豊かさの話です。ぐち類の種類がとても多いことも東シナ海の特徴です。日本沿岸には、ニベ、シログチ、コイチ、オオニベ、クログチ等数種しか分布していませんが、東シナ海には1.5mにも達する巨大種（シナオオニベ）から、量的に多いキグチ、10～15cmの小型種（コニベ、メプトカンダリ）まで20種近くが分布しています。ぐち類の生息に適している浅海域が発達していることに加え、水温、塩分、底質等が異なる多様な環境が混在していることが要因だと考えられます。ぐち類以外にも、舌平目類（ウシノシタ科）、マナガツオ科、フグ科魚類なども数多くの種が量的にも種数でも栄えていることから、東シナ海は、まさに底魚のうぶすな（産土）と言える海域です。ただ、浅海域というのは、漁場としてもとても利用し易い海域ですし、まして国際的な競争の激しい海域です。現在は、経済的価値の高いほとんどの底魚類の資源水準が非常に低くなっており、種の多様性も低下しています。貴重な底魚のうぶすなをどのように守り、再生させるかが課題です。



写真1 タチウオ



写真2 キグチ



写真3 韓国釜山市チャガルチ市場で販売されているタチウオやぐち類